

# 嶋満神社便り

平成二十五年五月号 (第6号)

発行 嶋満神社奉賛会

## 続、当社の狛犬さんのお話

前号では当社の狛犬さんは「阿吽対面型」であり、当地に多い「舞鶴狛犬文化圏」の特徴である「吽阿平行型」でないことから、戦争時期を挟んだ疎開遷宮前後の設置状態はどうであったか、という謎が生まれたというお話をしました。

津田家に伝わる資料を見せていただきました。

昭和十四年の疎開以前の資料では狛犬は残念ながら確認できません。では泉源寺疎開時代の写真は：：ありました！そして驚くべきことに狛犬さんは両方ともしつかりと前を向いており、更に現在とは左右逆の「吽阿平行型」になっているではありませんか！正に「舞鶴狛犬文化圏」の特徴そのものでありました。つまり昭和三十六年浮島復帰の折に左右が（阿吽が）置き替わっていたのです。

しかもこの写真をパソコンで拡大してみると、なんと台座の文字は左右が現在と同じです。右から「奉献」の奉と献が一字ずつ彫ってあります。要するに浮島復帰以前と以後では台座と上部の石像が「テレコ」になっているわけです。



泉源寺



浮島

浮島復帰時に若手だった父に尋ねました。曰く「昭和三十六年浮島復帰時に置き換えたことはない。（筆者注、記憶がないと言うべきか）しかし、

両方とも身体は対面しながら首だけはやや横にかしげており、参拝者の方を見る形になっているのであれでよい。」

なるほど、よく見ると確かに向かって右の阿形はやや左に、向かって左の吽形はやや右にかしげてやって来る参拝者の方を見ているかのようです。

泉源寺時代に平行して置かれていたときにはかした首がやや内向きになって参拝者の方を見ていた、これを対面する台座に左右逆に置くと首だけはやって来る参拝者を見る形になる。要するに結果オーライだったのではないか？ただし台座の文字「奉献」：：右読み：：だけは換えようがないので、台座と石像が「テレコ」になってしまった：：。こゝう推測されます。

さてここにはもう一つ、昭和十四年と三十六年の参道上り口の場所の変化という重要な要素があるように思えます。疎開前には山下一帯は広い公園で、現在の集会所あたりから真つ直ぐ参道が伸びていました。一方、浮島復帰時には山下一帯はすっきり建て込んでしまい、現在のように横向きに上り口をつけざるを得なかった。つまり台座を泉源寺時代と同じように平行に（縦長に）置く場所がなかったのてやむなく対面型にしたのではないか？

生存者の記憶も定かでなく、残存する資料からのみ推測すればざっとこんなストーリーが描けるのですが、皆さんはどう思われるでしょうか？

いずれにしても疎開前の狛犬さんの設置状態は謎として残ったままです。

ところで興味深いことに戦前から当社のお世話を頂いているのは吉坂岩室稻荷社の宮司さんですが、この狛犬が当社泉源寺時代と同じ「吽阿平行型」です。（しかも吽形が子取りで玉を抱く！）

## 岩室稻荷社の狛犬さん



これは同じ「舞鶴狛犬文化圏」として当然のことなのか、それとも当社疎開時の狛犬の置き方に先代宮司さんの意志が働いたのかどうか：：？またまた謎が謎を呼び、次号に続く！